アジア国際特急 南へ駆ける

縦断レポート

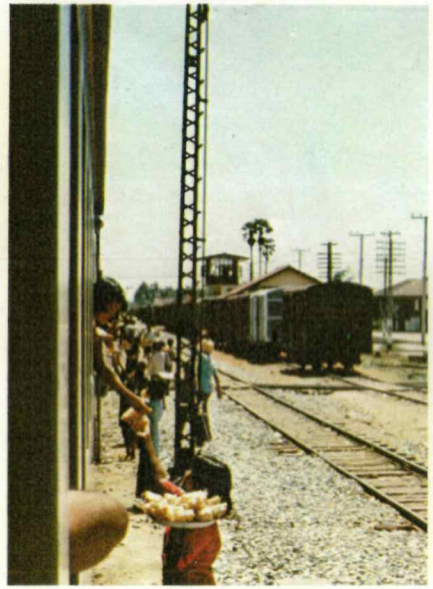
文・写真 近藤節夫

タイの車掌が挙手の礼で迎えた。

車窓の外にバンコク郊外の粗末な民家や水田風景が流れはじめた。強い日射にキラキラ光りながら国際特急は時速五〇キロで走る。熱帯の暑さもエアコン付の一等寝台車ではほとんど感じない。乗車したとき直立不動で挙手の礼をしてびっくりさせた専務車掌が「この冷房車はじつはメイド・イン・ジャパンなんだぞ」という。コンパートメントはゆったりとってあるし、シャワーもついている。バタワースまではてしなく続く水田のパノラマにディーゼルの音をひびかせてゆくと、線路ぎわに、人なつこい子どもが数人かけより、裸や腰布一つのまま列車に向って手を振る。こちらも手を振りかえすうちに現代が忘れていたほんとうの旅情があふれてくる。

ジャングルが夕陽に赫々と燃えた。

廊下づたいに二等、三等の車両へ足をのばし、タイ風俗にじかに触れる。長旅にそなえた大籠や包み、バケツなどで足のふみ場もないほどごった返しているが、みんなニコニコと親しみ気に話しかけてくる。たちまち日泰親善、笑いがはじける。この急行にはよくもこんなに種類があるなというほどさまざまな車両が連結されている。食堂車から風変りなチャーハンを出前してもらい、冷えたビールを飲む。ときたまハエもよってくる。専務車掌が停車する度に駅名を教えてくれた。ラチャ・ブリに近づくころ日没を見た。ヤシ林や水田が真赤に染まり、遠くのジャングルはまるで炎につつまれたようだ。やがて濃紺にくれた夕闇は、目に見えぬ花と果物の匂いでむせかえり、列車はひた走った。真夜中すぎ、ビルマ国境に近いチュンポンを通過するころからゆったりしたコンパートメントで熟睡。



水牛がのっそりと線路横断。

車窓からとびこむ強烈な日光と停車駅のポーターの叫び声で目が覚めた。車窓は しだいに変化を見せ、平原のなかに突然岩山が姿をみせたり、緑鮮やかな葉をゆするバナナやパパイヤの林があらわれる。水牛がのんびり横断している。悠長さは人もおなじで、こんどは停車する駅を二〇〇メートルばかり通過してしまった。ところが機関士はガンとしてもどろうとしない。しかたなく白服の駅員が自転車にとびのってタブレットをとどけてきた。昼まえにマレーシア国境の町パダン・ベサーにたどりつく。ここからはマレーシア時間になるので時計を三〇分進め、タイ国通貨バーツをマレーシアドルに両替する。のんきな入国手続きが済むと、とたんに車内が果実の香りでいっぱいになる。バナナ、ランブータン、ザボンを大籠に盛り上げた少年の物売りがのりこんできたのだ。バナナ一本一〇円にもみたない。籠にのこったのを全部買ってやったら大喜びで帰っていったが、発車まえに仲間をつれて戻ってきたのにはまいった。

激烈なスコールの真只中を走れ。

しばらくすると青く澄みわたっていた空に灰色の雲があらわれた。とおもう間もなくまっ暗になった中天から大粒の雨が滝のように落ちてきた。スコールの襲来だ。疾進する列車の窓がピリピリ震える。ヤシ林も獅子のたてがみのように葉をそよがせる。線路ぞいの道を歩いていたソンコ帽をかぶった男たち、バテツクをまとった女たちはずぶぬれだ。この豪雨もほんの一〇分でからりとあがり、濡れそぼった列車めがけてまた南の太陽が金色の矢を射しこんでくる。車窓はマレーシア色が濃くなってきた。壮観なはえんえんと続く整然としたゴム園風景だ。昼から夜へ、列車はこの巨大なゴバン模様の光と影を縫って進む。

車内はタイ語、マレー語、英語、ヒンズー語……

夜の食堂車へいくといろいろ、英国人、アメリカ人、中国人、インド人、タイ人、マレー人…。さながら人種見本市だ。ビールで乾杯しながら各国語やジェスチャーが入りみだれて愉快な国際交歓がつづく。ボーイやコックまで加わっておしゃべりでエール交換だ。翌日、朝昼兼用のブランチをとる。気やすくなったボーイのおじさんが、しきりに世話をやいてくれる。タイ、マレーシアどちらの通貨でもよく、香辛料のきいたカレー料理も実に安い。テーブルで同席したターバンをまいたインド人から新鮮なマンゴーをもらった。

列車は第二次世界大戦中の山下兵団のゆかりのアロールスター、スイゲイ・パタニをのぞき、懐かしの蒸気機関車とすれちがう。うす汚ない普通列車からも急行が珍らしいのか、いっせいにマレー人の顔がのぞく。車中二日目、シャワーを浴びる。一等車の特権だ。生き返ったようになって熱帯の甘ったるい大気を胸いっぱいに吸い込む。夕焼が美しい。バタワースへ着くとすぐに対岸にあるペナン島へ。フェリーでわずか十五分のこの島はマラッカ海峡の紺青にふちどられた美しい真珠だ。ここで二泊の途中下車を大いに愉しんだあと、ふたたび南下の旅を続ける。

南の果てにいま壮大な星座がまわる。

夜のバタワース駅はホームにも有色・白色さまざまな民族がごった返して東南アジアらしい素顔をのぞかせていた。この豪華な列車には土地のマレーシア人はあまり乗るチャンスがないのか、カーテンをあけたコンパートメントを窓ごしに珍らしそうにのぞきこむ。タイ鉄道からマレー鉄道にかわっても、素朴さはあいかわらずで、ソンコ帽をかぶったこんどの車掌もこれまた底ぬけに世話好きだ。列車がガタンと動きだしたとたん、明朝のモーニングサービスはなににするかと聞きにきた。列車はマレー半島の闇をつき進む。バタワースから乗ってきたインド人母子が暗い車窓をいつまでも みつめている。サリー姿の若い母親は美しい面をふせたきりだ。何か不幸があったとみえて男の子も元気がない。遠くのほうに村落の灯がゆっくりと流れていく。見上げると星が降るようだ。うろ覚えの知識で西に南十字星、東に金星とまわっていく星座を数えながら夜の更けるのを忘れる。ベッドにもぐりこんだとおもうと、すぐ車掌の声に目覚めた。「さあ、もうすぐ着くよ。コーヒーを飲んで顔を洗って…」熱いコーヒーが実にうまい。朝焼けに染まったクアラルンプールの回教寺院の尖塔が目の前に絵のように美しく浮かびあがっていた。

けだるい熱帯の午後にまどろむ。

さあ、いよいよシンガポールへの南下最後の旅だ。クアラルンプール発の冷房一等車は重厚なマホガニー造り。しきつめた赤じゅうたんも厚く、心地よい。車両三分の一が食堂車のほかは、広いスペースにゆったりした椅子を配したデラックス客車で、ちょっとした王侯気分だ。エアコンのない二・三等車では窓をあけはなしてあるので、乾いた風が吹きこんでいた。けだるい熱帯の午後、乗客の多くは気持よさそうにまどろんでいる。窓外にはときどき焼山もみえる。半島の内陸部あたりを走るころ、くすんだツートンカラーの英国製客車はすいこまれるように、大きなシダや、ランが葉をひろげたジャングルをくぐった。密生した木陰から野生の猿が数匹目をむいてこちらをうかがっているのがみえる。ふっと野獣の匂いがただよう。一瞬のジャングルの前、幻想だろうか。正午ごろ、ゲマス駅到着。列車交換の一時間ほど、ホームや駅周辺をぶらついた。対向列車がこないうちは大丈夫なので、そばの駄菓子屋をのぞいたり、ラワンやチーク材を積んだ貨物車が木炭車にけん引されるのを見学する。クロンを通過するころ、車外はますます明るく南の色彩にみちてきた。ゴム園のつらなりが陽を浴びて輝いている。うとうとと昼寝をむさぼるうちに、マレー南端の町ジョホールバールへ。ここで係官が乗りこんできて簡単な入国審査をすませる。

南下二千キロの陽灼けだ。

ジョホール水道をこえればいよいよ終着駅シンガポールだ。堤防のようなコーズウェイをゆくジョホール水道は名高いシンガポール攻防の激戦地としていまなお感動をさそう。デッキから身体をのりだして見守っていると、そばのハイウェイを走る車やバス、自転車から人々がいっせいに手を振って旅のフィナーレを飾ってくれる。この縦断のあいだにすっかり陽灼けした腕が目にとまる。日本へ帰ったら、あいつに「これが南下二千キロの陽灼けだ」といってやろう。列車は鋭い汽笛を鳴らすと赤道近く、旅の終りにむかって長いコーズウェイをゆっくりと渡っていく。

'74小田急
フレッシュツアー

大人＝228,000円
2才以上12才未満の場合208,000円
※8泊9日（うち車中2泊）
①昭和49年3月24日(日)→4月1日(月)
②昭和49年4月26日(金)→5月4日(土)
マレー半島縦断2,000キロ鉄道の旅